

持統天皇——日本文化史のなかの女性

下川逸雄

持統天皇は、天智天皇と遠智娘（おちのいらつめ）との間に生まれた。天智天皇は大化改新の中心人物であり、遠智娘の父蘇我倉山田石川麻呂は、蘇我氏の一族でありながら改新派の天智天皇側にひき入れられ、大極殿におけるクーデターの時は三韓からの上表文を読む役割を果たした人物であり、その娘と天智天皇との結びつきは完全な政略結婚であった。

持統天皇という名はおくり名であり、もとの名を鸕野讃良皇女（うののさららのひめみこ）という。大化改新が始まった西暦六四五（大化元）年に生まれたというのも何か因縁めいたものを感じさせる。

六五七（斉明天皇三）年、父天智天皇の同母弟大海人皇子の妃となった。まだ十三歳だったのだから、天智天皇が弟の協力を得るための政略結婚だったのだろう。同母姉大田皇女も大海人皇子の妃となっていたのだから、はじめのうちは鸕野皇女の存在はあまり大きくはなかったかもしれない。

百濟救援のため朝鮮半島に出兵していた真最中、六六二（天智称制元）年、鸕野皇女は筑紫の娜の大津で草壁皇子をもうけた。もしこの時うまれたのが女子であったら、彼女の後半生は大きく

変わっていたかもしれない。

翌六六三年、大田皇女が大津皇子をもうけた。この年八月二十七日、唐の軍船一百七十艘と白村江で戦火を交えた日本軍は、戦に敗れて半島から撤兵を余儀なくされた。九州の基地を撤収し、内政充実に方向転換をした中大兄皇子は近江大津宮に遷都し、六六八年即位して天智天皇となったのである。鸕野皇女は幼い草壁皇子をかかえ、外征・内政の危機をきりぬけようと懸命の努力をする父、またそれをたすける夫の姿をみまもっていたことだろう。六六七年二月、大田皇女を斉明天皇の陵前の墓に葬ったと日本書紀に書いてあるから、大津皇子をうんだ六六三年から六六七年の間に大田皇女はなくなっただろう。

姉大田皇女の死によって、鸕野皇女は思いがけなくも大海人皇子の第一の妃の地位を獲得した。もし大田皇女が長寿を全うすれば持統天皇の即位ということは考えられず、大津皇子の即位が実現したかもしれない。

六七一年十二月三日天智天皇は近江大津宮で崩じた。かねてから不満を抱いていた大海人皇子は六七二年六月吉野に兵を挙げ、いわゆる壬申の乱が始まったのである。天智天皇の後継者大友皇

子を倒した大海人皇子は六七三年二月飛鳥浄御原宮で即位した。世にいう天武天皇である。鷗野皇女は皇后として天皇の政治を輔佐した。天武朝の特色としてよくいわれることは、左右大臣を置かないのを初めとして臣下を政府の要職につけること少く、政府の中央は皇族によってかためられたことである。皇親政治によって天皇制は強化され、天皇家の勢力は拡張されて行ったのである。しかし天武天皇と皇后には大きな悩みがあった。天皇の後継者を容易に決定できなかったのである。天武天皇には皇子が十人、皇女が七人いた。この際血統が問題になるから皇后がうんだ草壁皇子と、大田皇女がうんだ大津皇子とが最も有力な候補者である。母はともに天智天皇の娘であって血統は問題ない。この二人より年長の高市皇子は、母が地方豪族胸形君徳善の娘であるから血統上除かれる。

母親をすでに失っている大津皇子より、現在の皇后を母にしている草壁皇子の方が有利であるが、草壁の立太子はすんなり事が運ばなかった。それは大津皇子が文武両道の達人で大人物の器であり、草壁皇子はそれにくらべて見劣りがしたのである。大津皇子は懐風藻所収の伝記によれば、身体容貌が大きくたくましく、人品(度量)が高く奥深く、文武両道に秀でていたというのである(日本古典文学大系による)。懐風藻や万葉集によってその作品を知ることができるし、人よりもすぐれた才能の持主であったことは事実であろう。

草壁皇子の人物についてはあまりよくわからない。天武天皇の皇太子になった人物でありながら史料があまりのこっていないのは、大津皇子にくらべて大人物とはいえない程度の人物ではなか

っただろうか。二十八歳で病歿しているところからみても病弱な傾向があったらうと考えられる。

万葉集巻二に、石川郎女をめぐって草壁皇子と大津皇子との三角関係の歌のこざれているが、結局草壁皇子は恋に敗れ、大津皇子が恋の勝利者になっている。石川郎女にとって大津皇子のどこがよかったのかわからないが、大津皇子の方が男性的魅力に富み、草壁皇子は柔弱な人物だったのではなからうか。

天武天皇としては、むしろ自分の性格をうけついで大津皇子の方をかわいく思ったかもしれない。大津皇子があとをついでくれば天皇権力の強大化には大きなプラスになると考えたことだろう。しかし、懐風藻の伝記によれば、「性頗る放蕩にして、法度に拘れず」とあり、規則に拘束されない、かなりほしいままな性格であつたらしい。律令体制の頂点になる者としては、これでは困るのである。天武天皇はなやんだに違いない。

大津皇子がどんなに立派な人物であつても鷗野皇后からみればあかの他人である。鷗野皇后としてはどうしても自分の腹をいためた草壁皇子にあとをつがせたかった。よく馬鹿な子ほどかわいいというが、草壁皇子が柔弱で人間的魅力に乏しければ、なおさら母親としては自分の力で草壁皇子を次の天皇にもりたてようと思つたのではなからうか。皇后から天皇への働きかけもあつたに違いない。

六七九年五月、天武天皇と皇后とは、草壁・大津・高市・河嶋・忍壁・芝基の諸皇子を連れて吉野宮に行った。そうして、

「朕、今日、汝等と俱に庭に盟いて、千歳の後に、事無からしめん」と欲す、いかに」

と語りかけた。皇子達は、まことにもつともなことでございますとたえ、草壁皇子がまず進み出て、

「天神地祇及び天皇、御覽下さい。自分達兄弟十余人は各々母親が違います。しかし同じ母親からうまれた兄弟のように天皇の勅にしたがって助けあつていきましよう。もしこの盟にそむいたら命を失い、子孫は絶えてしまふでしよう。忘れません。この盟にそむきませぬ。」

と申上げた。のこりの五人の皇子も同じように盟つた。天武天皇は、

「お前達は、各々異腹の兄弟だが、皆わけへだてなくかわいがる。」

といて六人の皇子をだきしめたという。吉野から兵を挙げて壬申の乱をおこしたことを考えれば、その思出の吉野でこのことがおこなわれたのはより一層劇的效果をたかめたであらう。

しかしこの誓いを信じた者が何人いただろうか。天武天皇自身信じていたかどうかわからない。はっきり口に出してはいわなかったが、吉野の盟では、血統第一位の草壁皇子の皇位継承を暗黙のうちにもめさせたことになる。鸕野皇后としてはその決定をいそぎたかったに違いない。吉野の盟は鸕野皇后が黒幕として動き、天武天皇をせきたてておこなわれたものに違いない。

六八一年二月、ついに草壁皇子は正式に皇太子に立てられた。同時に律令制定の計画を発表し、三月には史書編纂に着手した。

天武天皇の政治を制度化して草壁皇子が即位したあかつきに政治が円滑に進むように準備をととのえ、史書をつくることによって天皇統治の由来をとき、草壁皇子が即位した場合、それに権威づ

けをしようと考えたのであらう。これは鸕野皇后の天武天皇への協力であったばかりでなく、草壁皇子の将来を心配する母親としての愛情が強くはたらいっていたとも考えられるのではなからうか。草壁皇子の立太子を実現して天皇・皇后ともにはつとしたことだらう。しかし六八六年九月九日天武天皇はこの世を去つた。

専制君主として君臨していただけに、天武天皇の死は各方面に動揺を招いたに違いない。これを機に反乱がおこらぬものでもない。天武天皇によって皇太子にたてられた草壁皇子の地位もこうなればどうなるかわかつたものでもない。

鸕野皇后としては草壁皇太子の地位の安全をまもらなければならぬ。先手をうって反対派の出鼻をくじかなければならない。天皇崩御後まもなく、十月二日、大津皇子は謀反を企てているとの理由で逮捕され、翌三日直ちに死刑に処せられた。逮捕の翌日処刑ということは、ほとんど調査もされなかつただらうし、一味の者として逮捕された者の大部分がゆるされて、のちに朝廷で活躍しているということは、この事件は、大津皇子をおとしいれるために、むしろ鸕野皇后によって仕組まれた陰謀であらう。かわいいわが子草壁皇子の地位安泰のためには、邪魔者は倒されねばならないのである。

普通ならここで草壁皇太子の即位となるところだが、何故か皇太子の即位は実現せず、皇后の称制が続いた。草壁皇子が病床にあったのかもしれない。まもなく六八九年四月、草壁皇太子はわずか二十八歳でなくなつてゐる。

鸕野皇后としてはどん底につき落された気がしたことだらう。吉野の盟も草壁皇子を即位させるためであった。大津皇子を倒し

たのもわが子かわいさのあまりやったことである。それもこれも一瞬にして水泡に帰した。気性のはげしい彼女のことだからおそらく声をあげて号泣したことだろう。しかし悲しんでばかりいられない。機会あらばと考えている皇子達や貴族達が沢山いるのである。自分自身の力でこの難局をのりきるほかはないと決心した。六九〇年正月、皇后は正式に即位した。持統天皇である。

草壁皇子の遺児輕皇子は即位させたかったのだろうが、輕皇子はこの時まで八歳であった。即位させるにはまだあまりにも幼なすぎた。そこで皇后自身が即位して輕皇子の成長を待ったのである。

天武天皇の数多くの皇子の中に高市皇子がいた。卑母の故に皇位継承の順位では低く扱われていたが、年齢・人物ともに申し分なく、朝廷の中には高市皇子をと望む者もすくなくなかったらしい。この高市皇子を敵に廻しては危い。むしろ味方にひき入れた方が得策だと考えたのだらう。即位した年の七月、高市皇子を太政大臣に任命した。太政大臣は皇太子に準ずる地位で、持統天皇が高市皇子をあつとみとめたことになる。皇位を嫡孫にと考えていた持統天皇にとっては望ましいことではなかったが、当時の情勢からやむをえなかったのだらう。

ところが六九六年七月、高市皇子はなくなった。日本書紀は「後皇子尊薨」とごく簡単に記すだけである。自然の病死か、あるいはかくさなければならぬ特別な事情があつてわざとそつげなく書いたのか、詳しいことはわからない。

高市皇子の死後、持統天皇は王公卿士を官中に集めて誰を皇太

子にしようかと相談した。会議を開いて皇位継承を相談するといふのは他に例のないことである。夫を失い、草壁皇子までもなくなったあとの持統天皇は、いくら氣丈とはいへ、支えを失った今としては何かするものがほしかったのではあるまいか。そこにかよわい女心を見るような氣がする。もちろん律令体制がとつて来て貴族達の発言力が強くなったという背景はあるにしても、奈良時代にそんなことがおこなわれないことを考えれば、やはり異例のことである。

持統天皇の心の中には嫡孫輕皇子があつたがそれを出さなかつた。懷風藻の葛野王伝によれば、この時葛野王が進み出て、「我が国家の法と為る、神代より以来、子孫相承けて天位を襲げり、若し兄弟相及ぼさば則ち乱此より興らん……」と直系相続を主張した。葛野王は壬申の乱で敗れた大友皇子の長子であり、天武・持統朝では肩身の狭い思いをしていたことだらう。ここで持統天皇の氣に入ることを書いて自分の地位の安全をはかろうという氣持があつたのだらうが、持統天皇としては自分の氣持を代弁してくれる発言があつたので大いに喜んだ。

六九七年二月、輕皇子は立太子し、八月即位して文武天皇となつた。文武天皇即位後も持統太上天皇の政治に対する発言力は大きかつたようだが、七〇二年十二月、持統太上天皇は五十八歳で崩じた。皇位を自分の嫡流にという執念をもつていた彼女としては、その目的をはたして、やすらかな氣持で大往生をとげたことだらう。

(しもかわ いつお・専任・日本文化史)